



角川文庫

—1461—

細 雪

中 卷

谷崎潤一郎



角川書店



昭和三十一年十二月十五日
昭和三十三年一月二十日
初版發行
再版發行

定價 百圓

角川文庫

中卷
雪
全三冊
細



著者

谷崎潤一郎
たにざきじゅんいちろう

發行者

角川源義

印刷者

中内あき子
東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所

東京都千代田區富士見町二ノ七八
振替東京一九五二〇八

株式會社
角川書店
電話九段(33)〇二二(代表)

落丁・亂丁本はお取替へ致します

Printed in Japan

中光印刷・本間製本

細 雪

中 卷

谷崎潤一郎



角川文庫

1461

一

幸子^{さちこ}は去年黄疸を患つてから、とき／＼白眼^{しろめ}の色を氣にして鏡を覗き込む癖がついたが、あれから一年目で、今年も庭の平戸の花が盛りの時期を通り越して、よこれて来る季節になつてゐた。或る日彼女は所在なさに、例年のやうに葭簀^{よしす}張りの日覆ひの出来たテラスの下で白樺の椅子にかけながら、夕暮近い前栽^{せんざい}の初夏の景色を眺めてゐたが、ふと、去年夫に白眼の黄色いのを發見されたのがちやうど今頃であつたことを思ひ出すと、そのまゝ下りて行つて、あの時夫がしたやうに平戸の花のよこれたのを一つ／＼筆^{ひし}り始めた。彼女のつもりでは、夫が此の花のよこれたのを見るのが嫌ひなので、もう一時間もしたら歸宅する筈のその人の眼を喜ばすために、庭先を綺麗にしておきたかつたのであるが、ものゝ三十分もさうしてゐると、うしろに庭下駄の音が聞えて、へんに取り濟ました顔つきをしたお春が、手に名刺を持ちながら飛び石を傳はつて來た。

「此の方が、御寮人様^{ごせうじんさま}にお目に懸りたい仰つしやつていらつしやいます」

見ると、奥畑の名刺であつた。——たしか、一昨年^{せんねん}の春であつたか、一度此の青年が來訪したことはあつたけれども、平素出入りを許してゐる譯ではないし、女中達などの前ではその名を云ふことさへ控へてゐるくらゐなのであるが、お春のかう云ふ取り濟まし方は、明かにあの新聞の事件を知り、此の青年と妙子との關係を察してゐて、氣を廻してゐるものに違ひなかつた。

「今行きます。應接間にお通しゝときなさい」

手が花の蜜でべと／＼してゐるので、彼女は洗面所へ行つて蜜を洗ひ落して、二階でちよつと顔を直してから出た。

「えらいお待ちせ致しまして、……」

一と目で純英國製と知れる、殆ど白無地に近い明るいホームスパンの上衣に鼠のフランネルのズボンを穿いた奥畑は、這入つて來た幸子の姿を見ると、少しわざとらしい感じのする、仰々しい急激な動作で椅子から立ち上りながら「氣を付け」のやうな姿勢をした。妙子より三つか四つ年上であつた筈であるから、今年三十一二ぐらゐになるであらうか、此の前會つた時はまだ幾分か少年時代の面影を留めてゐたのに、此の一二年の間に大分肥満したらしいのは、追ひ／＼紳士型の體つきに變りつゝあるところなのであらう。でも、あいそ笑ひをして此方の顔色を窺ひ／＼、心持ち顔を突き出して訴へるやうな鼻聲で話しかける様子に、矢張「船場の坊ち^{ばん}」らしい甘つたるさが残つてはゐた。

「どうも御無沙汰してしまひまして、……一遍お伺ひせんならん思うてましてんけど、お許しのないのんに上つてえゝのんやらどうやら思うて、……お宅の前までは二三遍參つたんですが、よう這入らんとしまひましてん。……」

「まあ、氣の毒に。何で寄つてくれはれしません」

「僕、心臓弱いもんですさかい、……」

奥畑は早くも心安さうに、うふ、ふ、ふ、と鼻の先で薄笑ひをして見せた。

奥畑の方では何と思つてゐるか知れないけれども、幸子の彼に對する氣持は、前に訪問を受けた時とは多少異なるものがあつた。それと云ふのが、もう奥畑の啓坊けいぱんは昔のやうな純眞な青年ではなくなつてゐるらしいと云ふことを、近頃しばしば夫から聞かされるからなのであるが、貞之助は附合ひの關係でいろ／＼の機會に花柳界へ足を踏み入れることがあるので、よくさう云ふ方面から奥畑の噂を聞いて来る。その話に依ると、奥畑は始終宗右衛門町邊に出沒するばかりでなく、どうやら馴染の女などがあるらしいと云ふのであつた。で、啓坊があゝ云ふ風になつてゐることを、こいさんは知つてゐるのだらうか、もしこいさんが今もなほ、雪子ちゃんは何處かへ縁づくのを待つて啓坊と結婚するつもりでゐ、啓坊もそんな約束をしてゐるのであるなら、お前からこいさんに注意した方がよくはあるまいか、啓坊のあゝ云ふ行ひが、こいさんとの結婚が容易に許して貰へないで待ちくたびれた結果の焼けであるとすれば、酌量の餘地がないでもないが、それでは「眞面目な戀愛」だと稱してゐる看板に偽りがあることに成り、第一今日の非常時に不謹慎であると云ふべきで、今迄は蔭の同情者であつた自分達としても、あれを改めてくれない限り、將來二人と一緒にすることに骨を折ると云ふ譯には行かない、——と、貞之助はさう云つて、内氣を揉んでゐる様子だつたので、幸子はそれとなく妙子に聞いてみたことがあつた。妙子はしかし、啓ちやんの一家は先代のお父さんの時から花柳界に親しむ傾向があり、啓ちやんの兄さんや伯父さんなどもお茶屋遊びが好きなので、啓ちやん一人がさうと云ふ譯ではない、それに啓ちやんの場合は、貞之助兄さんのお察しの通り私との結婚問題がすら／＼運ばないところから、つい其方へ足が向くやうにもなるので、そのくらゐなことは啓ちやんの若さでは已むを得ないと、

私は思つてゐた、馴染の藝者があるなど云ふことは初耳だけれども、恐らく噂にとゞまることで、はつきりした證據でもあるなら格別、私にはそれは信じられない、但し此の事變下に不謹慎であると云ふ批難は免れないし、誤解を招くもとでもあるから、これからは是非お茶屋遊びを止めるやうに忠告しよう、私の云ふことなら何でも聴く人だから、止めてほしいと云へば止めるに違ひない、と云ふやうなことで、別にそのためにも奥畑を悪く思ふ風でもなく、そんなことぐらゐ前から分つてゐたことだ、驚くには當らないと云つたやうに落ち着き拂つてゐたので、幸子の方が顔負けをした程であつた。貞之助は、それほどいさんが啓坊を信じてゐるなら、何もわれわれが餘計なお切匙せきをすることはないと云つてゐたものゝ、矢張氣に懸ると見えて、その後も機會があるとその方面の女たちに様子を聞いてみることは怠らなかつたが、妙子が忠告した結果かどうか、最近にはあまり花柳界での噂を聞かないやうになつたので、内心喜んでゐたところ、今から半月ばかり前の或る晩の十時頃、梅田新道から客を送つて大阪驛へ行く途中で、自動車が投げらるヘッドライトの圈の中に、酔つた足取りで女給らしい女に寄り添ひながら歩いて行く奥畑の姿をちらと捉へたことがあつたので、さては近頃はかう云ふ方面で潜行的に享樂を追つてゐるのだなと心づいた。幸子はその晩夫からそのことを聞いた時に、こいさんには何も云はんと置きなさいと云はれたので、もう妙子には話さなかつたが、かうして今此の青年に向ひ合つて見ると、氣のせゐるか、顔つきや物の云ひ方にも何處となく眞率を缺いたところがあつて、「どうも近頃のあの男には好意が持てない」と云ふ夫の言葉に同感したくなるのであつた。

「——雪子ちゃんですか、——はあく、——いろ／＼なお方が心配してくれはりました、絶え

ず話がありますねんけど」

幸子は奥畑が、しきりに雪子の縁談の模様を聞きたがるのは、自分の方も早くしてくれと云ふ間接の催促なのであらう、どうせそれが目的で來たのに違ひないので、今にそのことを云ひ出すのであらうが、さうしたら何と答へようか、この前の時も單に「聞いて置く」と云ふ態度で終始したつもりで、何も言質を取られてゐる覚えはないが、今度は夫の考が前と變つて來てゐるとすれば、尙更注意して物を云はなければならぬ、私達は二人の結婚の邪魔をする氣はないけれども、最早や二人の戀の理解者であるとか同情者であるとか云ふ風に思はれたくはないのであるから、さう云ふ思ひ違ひをされないだけの挨拶をする必要があらう、と、内々そんな心づもりをしてゐると、奥畑は急にちよつと居ずまひを改めて、口付の煙草の灰を^{おやゆび}拇でトン／＼と灰皿に^ね弾き落しながら、

「實は僕、今日はいいさんのことで此方の姉さんをお願いせんらんことが出來まして、お邪魔に上つたんですが、……」

と、相變らず幸子のことを「姉さん」と呼んで話し始めた。

「さあ、どんなことでございませうか」

「……姉さんは勿論御承知のことゝ存じますが、近頃いさんは玉置徳子の學校へ通うて洋裁の稽古してはりますな。それはまあえゝとしましても、そのために人形の製作の方がだん／＼不熱心になつて來て、最近殆ど仕事らしい仕事してはれしません。そこで僕、どう云ふ考か知らん思つて聞いてみましたら、もう人形みたいなもん厭になつた、もつとみつちり洋裁を習うて、將

來はその方を専門にやる、今のところ、人形の方もたと注文受けてゐるし、弟子もあるさかい、一遍に止めることは出来んけど、追ひ／＼弟子に跡を譲ることにして、自分は洋裁の方で立つて行きたい、それには姉さん達の諒解も得て、半年か一年ぐらゐ佛蘭西へ遣らしてもろて、彼方で修業したと云ふ肩書を得て來んならん思うてる、云うてはりますねん。……」

「へえ、こいさんそんなこと云うてをりますか」

幸子は妙子が人形製作の餘暇に洋裁の稽古をしてゐることは聞いてゐたけれども、今奥畑が云つたやうなことは全く初耳なのであつた。

「さうですねん。——僕こいさんのしやはることに干渉する權利ありませんけど、折角こいさんが自分の力であれだけのものにしやはつて、世間でもこいさん獨得の藝術として認めるやうになつた仕事を、今こゝで止めてしまやはる云ふことはどうですやうか。それもたゞ止める云ふだけやつたら分つてますけど、洋裁をする云ふのが、分りませんねん。何でもその理由の一つとして、人形やつたら何ぼ上手に作つたかて、ほん一時の流行に過ぎん、直きに世間から飽かれてしもて、今に買うてくれる人もないやうになる、洋裁やつたら實用的なものやさかい、いつになつても需要が衰へん云やはりますねんけど、何でえゝとこのお嬢さんが、そんなことしてお金儲けんなんのですやうか。もう直き結婚しやはる人が、自活の方法講じんかてえゝやありませんか。僕が何ぼ甲斐性なしでも、まさかこいさんにお金の不自由さすやうなことせえしませんよつてに、職業婦人みたいなことはせんと置いてほしいんです。そら、こいさんは手先の器用な人ですさかい、何か仕事をせずにはをれん云ふ氣持は分りますけど、お金儲けが目的でなうて、趣

味としてやる云ふのんやつたら、假にも藝術と名の付くものゝ方が、どのくらゐ品もえゝし、人聞きもえゝか。人形の製作なら、えゝとこのお嬢さんや奥さんの餘技として、誰に聞かれたかて耻かしいことあれしませんけど、洋裁は止めてほしいんですね。恐らくこれは僕ばかりやない、本家や此方でもきつと僕と同意見に違ひない、僕請け合うとくさかいに相談してみなされ云うてましてんけど、……」

平素の奥畑はいやにゆつくり／＼と物を云ふ男で、そこに何か、大家の坊々としての鷹揚さを銜ふ様子が見えて不愉快なのであるが、今日は興奮してゐるらしく、いつもよりも急ぎ込んだ口調で云ふのであつた。

「それはまあ、御親切に御注意下さいまして有難うございます。何にしましても、一遍こいさんによろ聞いてみませんことには、……」

「はあ、何卒是非お聞きになつて下さい。こんなこと迄申し上げたら出過ぎてゐるかも知れませんが、もしほんたうにそない考へてはるのんやつたら、何とか一つ、姉さんからも意見して下さい、思ひ止まらして戴くこと出来しませんやうか。それから、洋行のことですけど、僕は佛蘭西へ行つたらいかん云ふのんやあれしません。何かもつと有意義なことを勉強しに行かはるのんやつたら、一遍行つて來やはるのもえゝことですし、さう云うては失禮ですが、費用ぐらゐ出さして戴きます。そして、僕かて一緒に附いて行きます。たゞ洋裁を習ふために出かける云ふことは、どうしても感心出来ませんので、まさかそんなこと、許さる筈はない思ひますけど、何卒それだけは止めさせて下さるやうに願ひしたいのです。まあ洋行したいのやつたら、結婚し

てからでも晩くはないのですし、僕としてはその方が都合がえゝのんですが、……」

幸子は實際、妙子に質してみないことには、彼女がどう云ふ考でそんなことを云つてゐるのか諒解に苦しむ點が多いのであつたが、それは兎に角、此の青年が妙子の將來の夫たることを既に公然と認められてゐるやうな口の利き方をするのに、軽い反感と滑稽とを覚えながら聞いてゐた。奥畑のつもりでは、自分が此のことをお願いに上つたと云へば、大いに幸子から同情もされ、打ち明けた相談もして貰へるものと思ひ込み、巧く行けば貞之助にも紹介して貰へるものと期待して、わざと今頃の時間を狙つて來たのであるらしく、「お願いの件」を話してしまつても、なかなか簡單には引き取らうとしないで、あれかこれかと此方の心持に探りを入れて來るのであつたが、幸子はあるべく要點を外して應對をし、いろ／＼妹のことについて御注意を戴いて有難いと云つた風に、此方からは努めて他人行儀な口を利いた。と、夫が歸つて來たらしく、表に靴の音がしたので、彼女は慌てゝ飛んで行つて、

「ちよつと！ 啓坊が來てはるねんわ」

と、玄關のドアを開けながら云つた。

「何の用で」

貞之助は土間に立つたまゝ、妻が手短かに耳元で囁くのを聞き取つてしまふと、

「それやつたら、僕は會ふ必要ないやないか」

「あたしかてそない思ひますねん」

「何とか云うて歸つて貰ひなさい」

でも奥畑はそれからまだ三十分もぐづ／＼してゐて、とう／＼貞之助が出て来る様子がないと見ると、やつと慇懃な挨拶をして立ち上つたが、

「何のおあいそもなうて、えらい失禮いたしました、——」

と、幸子はさう云つて送り出したゞけで、夫が會はなかつたことについては、わざと言譯をしな

二

奥畑の話が本當とすれば腑に落ちかねることなのであるが、妙子は近頃も矢張仕事が忙しいと云つてゐて、朝は大概貞之助や悦子と前後して出かけ、戻りはいつも一番おそく、三日に一度は外で夕飯を済まして歸宅するといふ風であつた。で、幸子はその晩は話をする折がなかつたので、翌朝夫と悦子とが出かけた後から、妙子がつゞいて出て行かうとするのを、

「ちよつと」

と止めて、

「こいさんに聞きたいことがあるねん」

と、應接間へ連れて行つて話した。

妙子は自分のことについて奥畑が姉に告げたこと、——人形の製作を洋裁に乗り換へようと欲してゐること、そのために短期間でも佛蘭西へ修業に行きたいと思つてゐること、等々を否定しようとはしなかつた。しかしだん／＼尋ねて行くと、それには一つ／＼相當な理由があつて、妙子

としてはなか／＼よく考へた結果であることが分つた。

人形の製作に飽きた譯と云ふのは、自分ももう大人になつたのであるから、いつ迄も少女のするやうなたわいのない仕事をするよりは、何かもつと社會的に有意義なことをやりたい、そしてそれには、自分の天分なり、嗜好なり、技術修得の便宜なりから、洋裁が一番よいと考へるに至つた。なぜなら、洋裁には早くから趣味を持つてゐて、ミシンを使ふことも上手であるし、ジャルダン・デ・モードやヴォーグなどゝ云ふ外國の雑誌を參考にして、自分の服は勿論のこと、幸子や悦子の物などをも縫つてゐたくらゐで、習ふと云つても、全然初步から始めるのではないから、上達も早く、且これならば將來一人前の腕になれるといふ自信が持てるからであつた。彼女は人形の製作が藝術で洋裁が品の悪い職業だと云ふ奥畑の意見を一笑に附して、自分は藝術家などゝ云ふ虚名は欲しくない、洋裁が品が悪いなら悪くても構はぬ、いつたい啓ちやんがそんなことを云ふのは時局への認識が足りないからで、今は子供欺しの人形などを拵へて喜んでゐられる時代ではあるまい、女性と雖もつと實生活につながりのある仕事をしなければ耻かしい時ではないか、と云ふのであつたが、幸子は、さう云ふ風に云はれてみると如何にも尤もで、一言も反對する餘地はないやうに感じた。しかし察するところ、妙子がさう云ふ健氣なことを心がけるに至つた裏面には、内々奥畑と云ふ青年に對する愛憎盡かしが含まれてゐるのではあるまいか、つまり、奥畑との間は、新聞にまで誣はれた仲であつて、義兄や姉たちや世間に對する意地もあるから、さう簡単に彼を捨てゝしまふ譯にも行かないので、口では負け惜しみを云つてゐるのであるが、事實はもうあの青年に見きりを付け、時機を待つて結婚の約束を解消したいのが本心なのではある

まいか、それで洋裁を習ひたいと云ふのは、さうなつた場合に自分は自立するより外に道がないと見て、その時に備へるつもりなのであらう、奥畑には妙子のさう云ふ深い底意が分らないので、「えゝとこのお嬢さん」が何でお金儲けをしたがつたり、職業婦人になりたがつたりするのか、合點が行かないのであらう、と、幸子は一往さう解釋した。そして、さう解釋すると、佛蘭西へ行きたいと云ふ意味も領けるのであつて、妙子の腹は、洋裁を習ふと云ふこともあらうけれども、それよりは洋行を機會に奥畑と離れることが、主たる目的なのであらう、だから奥畑に附いて來られては工合が悪い譯で、恐らく何とか口實を設けて、一人で行くことを主張するであらうと思へた。

けれども猶よく話して行くと、幸子の此の推察は半ば當つてゐるやうでもあり、半ば外れてゐるやうでもあつた。彼女は妙子が他から説得されるのでなしに、自發的に奥畑を見限るやうになつてくれゝば、それが一番望ましいことでもあるし、又妙子にはそのくらゐの分別はあるものと信じてゐたので、なるべく氣に觸ることは云はないやうにしながら、少しづつ遠廻しに尋ねたゞけなのであるが、それが果して本心なのか、負け惜しみの見せかけなのかははつきりしないけれども、妙子が表面何氣ないやうにして洩らす言葉のふしゝを綜合すると、兎に角今のところでは、奥畑を見限る心などはなく、矢張近い將來に彼と結婚する氣であるものと判斷するより外はなかつた。彼女に云はせると、自分は今日では啓ちやんと云ふ人間が典型的な船場の坊々であつて、ほんたうに取柄のない詰まらない男であることを誰よりもよく知つてゐるので、今更そのことについて貞之助兄さんや中姉なかあねちやんに注意を受ける迄もない、尤も、今から八九年前、始めて

啓ちやんを戀した頃には、自分はまだ思慮の足りない小娘であつたから、實は啓ちやんがこんな下らない人間であるとは知らなかつた譯であるが、しかし戀愛と云ふものは、相手の男が見込みがあるからとか、下らないからとか云ふことのみで、成り立つたり破れたりするものではあるまい、少くとも自分は、なつかしい初戀の人をさう云ふ功利的な理由で嫌ひにはなれない、自分は啓ちやんのやうな下らない人を戀するやうになつたのも何かの因縁と思ふばかりで、後悔はしてゐない、たゞ啓ちやんと結婚するについて、心配なのは生活の問題である、啓ちやんは株式組織になつてゐる奥畑商店の重役をしてゐ、その外にも、結婚すれば長兄から分けて貰へる筈の動産や不動産があるのださうで、當人は世の中と云ふものを甘く考へ、一向心配してゐないけれども、自分はどうも、啓ちやんと云ふ人はゆく／＼財産をなくす人であるやうな氣がしてならない、現に今日でも、啓ちやんは決して經濟的に辻褄の合ふ生活をしてゐるのではなく、毎月のお茶屋の勘定とか、洋服屋や雜貨屋の支拂とか云ふものが可なりの額に上るので、いつも母親に泣き付いて臍繰を融通して貰ふのだと聞いてゐる、が、それも母親の存生中だけで、彼女に萬一のことがあつたら、必ず長兄はそんな贅澤をさせてはおくまい、奥畑家にどれ程の資産があるにしても、啓ちやんはその家の三男坊であつて、既に兄の代になつてゐるとすれば、さう多くの分け前を期待する譯には行くまいし、殊にその兄が妙子との結婚に餘り賛成でないやうな場合には尙更である、假に相當のものを分けて貰つたとしても、株に手を出すとか、人に欺されるとか、云ふやうなことに引つかゝり易い性格であるから、しまひには兄弟たちにも見放されて食ふにも困るやうな日が來ないとも限らない、自分にはどうもその不安があり、さうなつた時に「それ見たことか」

と世間の人に後指をさゝれたくないから、生活の點で全然啓ちやんと云ふものを當てにしないで、行けるだけの、——反對に、自分がいつでも啓ちやんを食べさせて行けるだけの、——職業を身につけ、初めから啓ちやんの収入に頼らないでやつて行きたい、自分が洋裁で自立することを思ひ付いた動機の一つは此處にある、と云ふのであつた。

尙又、幸子は妙子の話のうちに、彼女が最早や東京の本家へは決して引き取られない覺悟であることも、ほど察しがついた。尤も此のことは、本家の兄や姉たちも雪子一人をさへ持て餘してゐるくらゐで、さしあたり妙子と呼び寄せる意志はないらしいと云ふことを、いつぞや雪子も云つてゐたのであるが、今日となつては、たとひ本家が呼び寄せようとしても、恐らく妙子はそれに應じないであらうと思へた。彼女は義兄が東京へ移住して以來一層締まり屋になつたと云ふ噂を聞くにつけても、自分は多少の貯へも出来てをり、人形の方で収入もあることだから、もつと月の仕送りを減らして貰つてもよいと思つてゐる、本家も六人の子供達が追ひ／＼成長するし、雪姉きあんちやんのことも見て上げなければならぬし、なか／＼經費が懸るであらうから、何とかして兄さんや姉ちやんの負擔を軽くして上げたいと思つてゐるので、そのうちには全然仕送りを斷つてもやつて行けるやうになるであらう、たゞ、兄さんや姉ちやんに是非聴き入れて貰ひたいのは、來年あたり佛蘭西へ修行に行くことを許可してくれることゝ、お父さんから預かつてゐる筈の私の結婚の支度金の一部、もしくは全部を、その洋行費として出してくれることである。自分は兄さんが自分のために預かつてゐるものが何程あるかよく知らないが、半年か一年間の巴里滞在費と往復の船賃ぐらゐには事を缺かないであらうから、何卒是非それを出して貰ひたい、自分